



随

想

失われゆく自然

泉 敏 夫

自然が失われてゆくのを嘆いている近頃、ジャン・ドールという鳥類学者の書いた『自然が減じる前に』という書物を偶々

よんだ。彼は、人間が自然を破壊し、また人間の友である動物をも絶やそうとしていると述べ、さらに「人類は二十世紀に、この百年間十六億から七十億に達するであろう。二十世紀末を迎えた時に、一部の人間が海藻や砂漠耕作にその救済を期待する空想的な楽観的考えに拘らず、世界の食糧総量と人類の需要との間の危険な溝は益々深くなっているに違いない。人間はその高慢から楽観主義となり、また彼の想像力が、その虚栄から未来の人類の危機を避けうるが如く私達を信じこませるが、一体何がそれを保証できるのか。」とのべ、人間の高慢に警告を発している。(引用は Jaen Dorst: *Avant que la nature meure*. 1965 より。)

わが国では過剰人口の問題は特に深刻であるが、かかることは専門家におまかせするとして、先のドールが人間の楽観主義に疑いをなげかけたように、私は最近の身近な世の現象に焦点をむけながら、自然とそれを傷けるものについて少し考えてみたい。

ちかごろ、盛り場に、釣堀なる店が現われていて。いわば金魚すくいの大人数とい

ったところ。鯉などを客に釣らすのである。店の中は、低い天井下の深く大きな水漕には、青い染料を溶かした水がたたえてあり、魚の姿はみえず、客は大公望よろしく竿を垂れ、ウキをじっとみつめている。客の年齢は二十代が圧倒的で神妙な顔で釣っていた。さすがに歌謡曲は鳴ってはいなかった。いわば似而非自然に遊ぶ典型であろう。この状態は楽音を人工的に増幅して酔うエレキと同類かもしれぬ。しかし真因は、宅地造成のため郊外の沼池を埋められ、海は工場汚水で魚も棲まなくなったために、町のさなかに釣堀が現われてくるのではないだろうか。それは奪われゆく自然の悲しい一面を象徴し、青年が静を求める天性を暗示しつつ、何か現代の哀れさを漂わせているようである。近くは滋賀守山のゲンジボタルも農薬のため年々極度に減少しているという。かかる自然の破壊は、全国の都市化や工場誘致の無統制な推進に原因がありそうだが、この上に、自然美を求めながら自然を破壊している現状をも見過せない。例えば比叡の野鳥は自動車道路のため年々減少し、比良では天然記念物のモリアオガ

エルの群生地八雲平の湿原が危胎に瀕している。このように、自然美をもとめる観光開発ムードが、その効果の慎重な計画にもとずかないために生ずる遺憾な例はいたる所に見出せよう。

都会のさなかの狭い店の釣堀に糸を垂れる哀れな大公望をみて、私はひそかに、宇宙開発・高度成長・科学万能・レジャーなどの呼声に応ずる前に、凡ゆる開発が高度の計画性をもって、人間性の正しい理解を通し、それを高めることを究極の目的としてほしいと考えている。

(女子大助教授・フランス語)

文芸裁判

大野 真 義

昨年の六月に京都地方裁判所より検察側の申請にもとづいて、事件の鑑定を依頼された。その事件は昭和三十六年十二月に起訴された猥褻図書販売罪に係わるもので、

既に過去四年の間裁判審理が続行されてきたが、いまだに結論に達せず今日に至っている。私は猥褻図書と目されているものの証拠鑑定を依頼されたが、その後約半年余り、参考資料の蒐集に予想外の困難を伴った為、いまだに鑑定書を作成するに至っていない。問題の書物は、江戸時代の浮世絵草紙を現代調に再現したものであって、芸術か猥褻かの対立的判断を伴うものである。この事件については語れないが、裁判判断の困難性は他の文芸裁判と共通のものがある。

戦後の著名な文芸裁判といえは、周知のチャタレイ裁判やサド裁判を挙げることが出来るが、最近でも昨年秋季に発禁処分を受けた「ファニー・ヒル」の日本語訳(吉田健一訳)が問題化している。「ファニー・ヒル」は十八世紀のイギリスの好色文学者クランドの古典として著名なもので、わが国へは夙に昭和初期に文芸資料研究会版で翻訳紹介がなされ、戦後も逸早く紫書房より「情婦ヒル」(松戸淳訳)として公刊され発禁となったものである。海外においても幾度か裁判沙汰を生じ、アメリカでは一

九六三年にニューヨーク州最高裁において無罪の判決を得ているが、その翌年母国のイギリスにおいては有罪の宣告を受けている。更に又、武智鉄二氏の映画「黒い雪」を廻って、映論の良識が云々され、映論の審査員までが共に猥褻物陳列罪に問われて起訴された事実も、ごく最近の新聞を賑わしたところである。

このような諸事件の発生を契機として、芸術と猥褻——殊にその刑法上の概念を廻って、とかく物議をかもしてきた。刑法第一七五条は次のように規定している。「猥褻ノ文書、図書其他ノ物ヲ頒布若クハ販売シ又ハ公然之ヲ陳列シタル者ハ二年以下ノ懲役又ハ五千円以下ノ罰金若クハ科料ニ処ス販売ノ目的ヲ以テ之ヲ所持シタル者亦同シ」猥褻図書販売罪や猥褻物陳列罪等を規制するこの条文からは、猥褻の何たるかは明確に出てこない。つまり刑法にいわゆる「猥褻」の概念は、犯罪を構成する要件としては最も規範的なものと考えられ、それは時の社会通念によって判断決定されるべき性質のものである。いいかえれば、この概念の確定は一切が裁判官の評価的認識活

動に委ねられるべきものであって、裁判官はこの概念を刑法の規定の上から明確化出来ない限り、公序良俗とか善良の風俗といった社会規範や歴史的社会事情たるいわば社会通念によって、評価決定しなければならぬ。

そこでこの種の事件に関して、よく法律家の石頭や無理解が、文学者や一般世間の識者等の非難の対象となる。法律家は自らの判断や良識が必ずしも社会の常識と軌を一にするものでないことは承知している。われわれにとって当然のことと思える法律判断が、いかに社会の常識とかけ離れたものであるかを時折思い知らされることがある。それだけに文芸裁判における猥褻の概念は、それが社会通念を基準とするものである限り、良識の上からも満足のゆく意義を確定しなくてはならないと思う。私は検察側の申請によって猥褻事件の証拠鑑定を行なうので、恐らく文学者等から石頭と非難されるであろう。しかしその意義を確定するに当って単なる法律家の法律判断で処理するつもりはないが、ただ何を以って社会通念とするかの判断の基準に腐心してい

る。

当局の助力を得て蒐集した資料の中には非合法法に出版された猥褻図書も多い。伝え聞いた友人が遠方より訪ねて来て見せるとせがまれることがしばしばある。友遠方より来たる、また楽しからずやの感も、今の私の場合いささか微妙である。

(校友・阪大助教授)

古都の姿

納屋嘉治

京の冬は殊のほかきびしい。その寒さはたとえようもない身をきるようなことがらさがささいこむ底びえなどは、酷寒零下何度というシベリヤのそれにもまじたまきびしさをもっている。こうした自然の試練をうけながらまだ太陽は、深く山下にねむっている早晩から起き出て、床をふき、庭をはき道具を整え、一枚の落葉も残さず、一点のちりもとどめず、日本の伝統を守っている

人達の姿は、誰が知っているであろうか。お茶といえ、およそ、私らの生活からかけはなれたものであり、それは金持の道具か、娘の嫁入り道具の一つ位にしか考えていない人達は、この禅寺の雲水にも増した修業を想像ができるであろうか。

晩秋、今日庵の茶室に単座する。宗家のシンボルである庭の大銀杏に空つ風がふきつける。かん高いモズの声や、野鳩のどんな鳴声が一層興趣をそえる。電気もなければガスもない。凡そ文明というものの恩恵からほど遠いこの茶室には自然の中に生きる人間の喜びがこみあげてくる。一切の虚色をすて、独座して一盃の茶を前にした時、初めて味う人間の気宇の雄大なことよ。木の枝をぬうようにして入っている秋の弱い柔かい太陽の光が天井の突上げ窓から茶室に入ってくるではないか。ああ自然のよき太陽の有難さ、忘れていたような自然の摂理が部屋一ぱいたちこめるのである。唯自然と共に生きる人間の姿ということだろう。

こんな一隅が都にある。これは求めよう

として求められるものでなく創ろうとして出来るものではない。唯永年の伝統というものを守ろうとするひたむきな人間の情熱が相重つての所産なのである。ここに先祖の意思が活きているのである。これを文化財といい歴史というならば、この意思を尊重し、これを完全に守り次代へ継承するということは、今日を生きる人達の責任でなくして何であらう。

思えば京都も随分変つた。近代化した。ビルは、立ち並びホテルは整い、観光客は年々激増の一途をたどっている。こうしてこの街を訪れる人達が増えれば増えるほどこの人情は、薄くなり何事も機械の手をかりて簡単にすませるようになる。あのさびたお寺や神宮でテープにふきこんだ説明を聞きギッシリつまつた予定に追われて見学する人達を見た時、果してこうした人々は京都をどう思つてみてくれることであらうかと思ふ。こうした人々が成人して自分らの子供らに京の印象をどう語ることでであらうか。時代のテンポというものは、ある程度はやむを得ないけれど、本當の京の姿というものを守り、それを伝えることの努力

は決してなござりにされたのではならないと信じている。これをどうして具現してゆくか、私は私なりに出版という事業を通して努力を続けてゆきたいと考えている。本當の京のよさというものを文学にし写真にして伝え残してゆく、考えてみればこんなに大切な生き甲斐のある仕事があるうか。私は、京のよさの永遠性を信じるが故にこれを継承するための一翼を出版のことで担当してゆきたいと念じている。

(昭三三年大経卒・淡交新社社長)

澄むと濁ると

藤原市太郎

正月には小倉百人一首のかるた取りに興じる中学生もあるが、その歌の意味を理解している者は、甚だ少ないのではなからうか。今の中学生にとっては、昔の古い文章は全く聞き馴れない言葉で、かえって英語の方が親しみ易くさえ感じているかも知れ

ないと、ひがんでみることもすらある。

私も漸く五十の齡に達し、頭髮が甚だ淋しくなつて来たが、若い時に百人一首の読み手となつた際、から札として次の狂歌を讀み上げたものであつた。「世の中は澄むと濁るの違ひにてハケに毛が有りハゲに毛が無し。」

これを授業中にもち出し、黒板に書き出すと、薄い頭部を後ろから眺めて生徒達がクスクス笑つ。そこで、やおら向き直つて次の問題を与えるという順序になる。

ちはやぶる神代もきかず童田川

から紅に水く〇るとは

この和歌の〇の中へ、仮名を一字入れさせるのである。だいたい「く」と「ぐ」が半々ぐらいの結果が出る。そこでおもむろに次の如く訳すという次第である。

「童田川の川面には、色鮮やかな紅葉が浮きつ沈みつ一ぱい流れていて、あたかも川水を絞り染めしているように見える。だが川水の絞り染めなどは、不思議なことが多かった神代にだって聞いたことがない。」

なにしろ「絞り染め——くくり染め」な

どということでは中学生にはわからない。どうしても「水」だから、くぐると言いたくて、まちがう者のあるのも無理はない。更に、ついでにお添え物として左のような漫談をしてやる。

昔、角力取りの竜田川が、ちはやという娘に求婚したが断られた。(ちはやぶる)それで仕方なく妹の神代に再度申し込んだが、これも聞き入れられない。(神代もきかず)その後、角力取りをやめて豆腐屋を開業したところ、或る日落ちぶれたちはやが、食事にさえこと欠き、物乞いとなって竜田川の店とも知らず豆腐のおカラをもらいに行つた。しかし竜田川は怒んでいてくれない。(竜田川から紅に)彼女は我が身の不幸を嘆き、川へ身投げをして水をくぐつた。彼女の幼名を「とは」と言つた。(水くぐるとは)

「どうだ。これは『神田川』という落語を少し変えて話したのだが、この落語の作者も、『水くぐる』をわざと『水くぐる』とふざけて言っている。誰でもまちがひ易いのだ。だから君達も古文を勉強する時は、よいかげんな解釈を下さず、辞書などでよ

く調べるんだよ。刷毛と禿では全く反対になるのだから。」

と、最後に我田引水、教師臭をブンとさせ、お笑い教室が幕となるのである。

(中学校教諭・国語)

精神の形成

深田尚彦

日本の大学は全ヨーロッパより数が多いと聞いた。それらの大学でセッセとマスプされた学生が専攻に関係なく多くの職場について行く。学生も変だが採用側も変である。あるいは大学で学んだ事の価値が社会で全く認められてないと言う事である。

向学心に燃えた人が在学するのはその効果如何よりも、教育の自由として望ましく、その結果は案外に思わぬ所へ役立つのだからと思う。すなわち大学が人間を作り思考を養うと言うのなら大いに分かるのである。

しかし昨今の大学は、世論に慮えて「すぐに間に合う人間」と言う事にならずに頭を使っているのではないかと思う。小さい専門領域での熟練なら年期奉公がよい。また機械の進歩は運転者の必要知識をドンドン引下げるのである。オートメーションの進歩は人間の低次の知的作用の代りをする。こう考えると人間のみの独自性は思考、工夫、創造であつて一見関係のないような物の間の関連を見つける事である。これは狭い技術的訓練からは生まれず、広い包括的視野と理論を要求するのである。

インスタントビジネスマンや技術者を作るのなら専門学校、職業学校であろう。中味は何でもよい名称は大学にしておきたいと言う所に誤りがあるようである。もちろん大学と言う名称の使用に難しい制限はなからうが、本来大学は広く学問をして来たので、現在の様にマスプロ、インスタントと言う言葉のなかつた時代の組織なのである。「百年を圖らんとすれば人を育てよ」と言われた校祖の言葉を思い起して、われわれは遠い星と希望に向つて進みたいものである。学問は広さの上に立ち、技術的な

狭さと深さで目的を遂げると言えよう。

人間は馬ほど走れず、海賊ほど泳げず、鷺のように飛べないが、脳と言う打出の小槌で自動車、潜水艦、飛行機を振り出した。それのみか水陸両用車、ヘリコプターを生み出し、更に空飛ぶ潜水艦まで考えつくのである。舟や飛行機の製作に先立つアイデアが文明の核心なのである。

今すぐ間に合う事ではなく、いつの日かに有用な脳の訓練こそ基本なのである。われわれは明治以後物質の進歩で世界を驚倒させたが、精神の形成をなおざりにしたようである。

大学は手先でなく人を作るのである。

日本の数多い大学が凡て社会の注文に依じていては困るので、少しは世相を顧る事なく超然と歩む大学があってもよからう。

大学の四年はどちらにころんでも一般教養であり、それ位で文学、工学、法学等のどれかの領域で専門家を作れると考える人はあるまいし、また学問はそれほど安易でもあるまい。

中途半端なインスタント人を作るのではなく徹底して教養ある人を作るべきであらう。

その人は、何の専門とは言えないが何をやらせても充分に実らせる素地を持っているからである。

耕された土地を用意する事こそ教養であり、これこそ国家の将来を安定させるものであり真の大学の使命と言える物であろう。

(校友・女子大助教授・心理学)

信仰と生活

伊藤 朗

学校の私の部屋に、五十センチメートル四方位の和紙に黒々と大きく「今」と書かれた額がかかっています。この書は二、三年前、ある道具展で見つけた支那の泰山の拓本の一部分です。私が大変気に入ったのは、この書そのものよりも、この「今」なる字の意味するものです。

私はこの「今」をいつも眺めながらこの二、三年、会う人ごとに私なりの「今」の哲学を話してきました。

昔から「老人は過去を語り、若人は将来を夢みる」といわれています。私たちの日常生活もこのいずれかに足がかかっています。案内現在、つまり、「今」この時がおろそかにされているのではないのでしょうか。私などは時々「今」からはるかに遠い世界に住んでいる自分を発見することがよくあるのです。「明日は何があつたか。」「次の休みはどこに行こうか?」「あの頃はよかつたな。」「まあいや、これは明日やろう」というような生き方は、まさしく自分の「生」を過去や未来にかけているのであって、現在を「生き生き」と生きていることにはどうしてもならないのです。このごろの流行歌に「明日がある、明日がある……」。などと歌われていますが、実は明日という日はいつまでたっても明日であって明日という日は永遠に來ない日だとさえいえますし、私どもが明日を期待するほど、明日は私どもにとってすばらしいものではないのです。タルムードにはその逆に「若し今を尊ばないなら……今という時があるか」といっています。

私はこの「今」を尊ぶ生き方が、実は信
仰者としての生き方だと思っております。最近
読みかえしているE・ビュルニエの言葉の
中に、「祈ったり、働いたりするだけでは
十分ではない。自分の仕事そのものが祈り
にならないといけない」とあります。私
がこの仕事をしている、今、この時が恵み
の時であり、神への感謝と喜びの祈りの時
にならないといけないのです。また、

「信仰者の知識人の真の使命は、神のため
に働くことではない（神は、そのような働
きが必要としたまわない）神とともに働く
ことが必要なのである」といっています。
つまりこのことは、神が預言者を通してい
われたインマヌエル（神、われらとともに
います）との信仰告白であり、神とともに
働くことの告白であって、私たちの日々の
仕事（祈りとなり、祈りが仕事とならなけ
ればならないのです）。

今、私たちがちよっと仕事の手を休め
てふりかえってごらん下さい。今、この時
をどのように生きているかを……。

どのような場所に、どのような状態で私
がいようと、心の底から「インマヌエル」

との告白をしているかどうかを……。

こうなると信仰とは、まさしく、主を告
白する者の生活に他ならないのです。「今」
を尊ぶことが信仰者としての生き方ならば
「今」を生きる「生活」が信仰にまでなら
なければなりません。

だから、私たちの生活をないがしろにし
て私たちの信仰もあつたものではありませ
ん。聖書にも「わたしが来たのは羊に命を
得させ豊かに得させるためである」とあり
ますように、私たちが生活を豊かに生きる
ことが、実は信仰者としての生き方なので
す。（信仰者の生活は決して禁欲的な生活
をすることではありません。といっても、
享楽的に生きることでも勿論ありません。

そのようなものから全く自由にされた生を
生きたことなのです）二度と来ない私たち
の生を、より豊かに生きることへの願いは
信仰者であろうとなかろうと、誰しもの願
いでありましょう。このような願望を、た
だの願いに終らせないには、まず今、この
時を生きたことです。しかしそれには勇氣
がいるのです。——今の自分、今の生活を

知れば知るほど、実は人間は過去や将来に
生きようとするものです——だから、人間
は自分自身を、今、この時に生かすには勇
気がいるのです。そして、その勇氣とは、
とりもなおさず「インマヌエル」との信仰
なのです。そしてその信仰に生きる時、私
たちの生活が祈りと感謝の祝福の中におか
れていくのです。へブル人への手紙の中
に、

「きよう、み声を聞いたなら、あなたがた
の心を、かたくなにはいけない」
とあります。かたくなな心が、現在、今、
この時の生活をないがしろにしているの
ではないでしょうか。

（昭二五大神・青山学院初等部宗教主任）

